四天王寺大学紀要　第49号（2010年3月）

日本人から見た中国人の国民性
－明治後半期の中国旅行記を中心に－

呂　　順　長

本稿は明治後半期に中国旅行または滞在の経験を持った高瀬敏徳、徳富蘇峰、宇野哲人らによる中国人国民性に関する著述に基づいて、彼らの中国人国民性に対する認識をまとめ、さらに日本人による中国人国民性議論の背景、中国人自らによる中国人国民性議論との関連を考察したものである。

「支那に国家なし」「支那人は利得の念盛なり」「固陋保守容易に移り難し」「文弱的国民」「虚礼虚儀」などの指摘に代表されるように、多くの日本人論者の中国人国民性認識は強烈な批判を主な内容としている。そこには、清末の中国において、政治が正しく行われず、社会秩序が混乱し国民が苦難に喘ぐという中国国内の深刻な状況、明治時代とりわけ日清戦争後に広まった日本の中国に対する蔑視と差別の風潮、中国侵出とも関連する中国への関心、日本国内における日本人国民性議論や日清戦争と日露戦争の戦勝などによって高められた日本民族優越意識、アメリカ人宣教師A・H・スミス著『Chinese Characteristics』の日本への紹介、などの背景がある。また、ほぼ同じ時期に中国人日本留学生など日本滞在経験者を中心に中国人自らによる中国人国民性批判も盛んに行われていた。そこには日本人の議論から受けた影響が多く見られるが、その一方で中国人自らの批判は自国民に奮起を促すための強い愛国心によるものと言え、日本人のそれと比べれば、論じ方や動機の面においては大きな違いが見られる。

キーワード：中国旅行記　中国人国民性　中国蔑視　日本民族優越意識　留学生

はじめに

江戸時代においては、中国に関心を持つ日本人にとって、中国は憧れの国であると同時に未だ知られざる幻想の国でもあった。しかし、明治時代になると、とりわけ日清戦争後は日本における中国への関心の高まりに伴い、中国への渡航者が急増し、日本人は自らの目で中国の様子を確かめられるようになった。

中国に渡った日本人の中国人及び中国社会に対する認識は、例えば「北京に遊ぶもの殺風景なる生活に倦みて、却て面白き人事の研究を忽にし、不潔の都会、虚偽の人民なる概括的評語を以て一切を断定し了るもの多し」[1)]という指摘のように、総じて厳しいものが多い。では、具体的に多くの中国渡航者の目に映った清朝末期の中国の姿はいかなるものであったか、彼らは中国人の国民性についてどう認識していたか、これは実に興味深い問題である。

本稿は明治後半期に中国旅行または滞在の経験を持った日本人の中国人国民性に対する認識を中心に取り上げるものであるが、それに関連する先行研究は、管見の限りでは主に次の

ようなものがある。杉井六郎「徳富蘇峰の中国観－とくに日清戦争を中心として－」（人文学報、京都大学人文科学研究所、30号、1970年３月）、安藤彦太郎『日本人の中国観』（勁草書房、1971年３月）、範伯群・沢谷敏行「魯迅與斯密斯、安岡秀夫関於中国国民性的言論之比較（魯迅とアーサー・スミス、安岡秀夫の中国国民性に関する議論の比較）」（魯迅研究月刊、1997年第４期）、李冬木「渋江保訳『支那人気質』与魯迅―魯迅与日本書之一（渋江保訳『支那人気質』と魯迅―魯迅と日本書・その一）」（関西外国語大学研究論集、上・下、67号・1998年２月、68号・1998年８月）、劉家鑫「長野郎の中国観について」（新潟史学、43号、1999年10月）、小島晋治「日本人の中国観の変化―幕末、維新期を中心に―」（日中文化論集、神奈川大学人文学研究所、2002年３月）、王向遠「日本対華侵略與所謂“支那国民性研究”（日本の対中国侵略とその所謂「支那国民性研究」）」（江海学刊、2006年３月）、兪祖華・趙慧峰「傍観・比較・自省：近代中外人士三重視野下的中国国民性（傍観・比較・自省―近代における内外の識者から見た中国の国民性）」（煙台大学学報、第19巻第２期、2006年４月）。これらの研究成果の内容は紙幅の関係もあり、ここで逐一紹介できないが、明治後半期の日本人中国旅行者の中国国民性議論に関するまとまった研究論文は管見のところ見当らない。

本稿では、上記の先行研究を踏まえながら、明治後半期（日清戦争後）における日本人の中国旅行記録をもとにして、「日本人から見た中国人の国民性」を明らかにしたうえで、さらに日本における中国人国民性議論の背景、中国人自らによる国民性議論との関連について考察する。

一、高瀬敏徳らの中国旅行とその関連著述

中国人の国民性について言及されている旅行記や文章が数多くあるなか、本稿ではその成立時期、内容、作者の身分などから、日本人教習として中国で教鞭を執った高瀬敏徳、ジャーナリストの徳富蘇峰、中国哲学者の宇野哲人、大使館書記官の奥田竹松、本名未詳の「太白散人」（号と思われる）などの関連著述を主な分析材料とする。以下、まず彼らの中国滞在または旅行の経過及びその関連著述について触れておく。

高瀬敏徳、字は花陵、肥後国の出身である。明治35年[2]８月、北京東文学社[3]の日本人教員として[4]中国にわたり、教職の傍ら北清地方を広く遊歴している。氏はみずから見聞した北京及びその周辺地域の中国人の風俗習慣などを記録し、さらにそれに基づく中国人の国民性に関する独自の考えを「支那」と題して書き残し、あわせて『北清見聞録』（金港堂、明治37年６月）として出版している。同書には徳富蘇峰、上野岩太郎、海老名弾正、浮田和民など多くの識者の序が掲げられ、当時広く読まれたことを覗わせる。また、氏は明治36年２月、３月、６月に、三回にわたって中国滞在通信をそれぞれ「支那事情」または「支那所観」と題して本郷教会機関紙『新人』（明治33年に海老名弾正により創刊）に寄せている。後にそれが殆んどそのまま『北清見聞録』となっている。

徳富蘇峰が初めて中国を目指して新橋を発ったのは明治39年５月25日である。明治29年の欧米漫遊からちょうど10年ぶりの海外遊歴である。朝鮮の釜山・京城・仁川・平壌を経由して中国に入り、中国東北の安東・奉天・遼陽・大連・営口、華北の天津・北京、華東の蘇州・鎮

江・南京・上海・杭州、華中の長沙・漢口・武昌などを漫遊し、8月10日に帰還するまで78日に及ぶ大旅行であった。徳富はその11年後の1917年にも同じく約80日をかけて中国の東北・華北・華中・華東の各地方を旅しているが、この時は初めての中国漫遊であるだけに、「単に有益の旅行たりしのみならず、又た最も興味饒き旅行たりし也。（中略）十年振りの遊歴としては、単に満足するのみならず、寧ろ望外の幸福となすのみ。」[5)] と自らも感想を述べているように、その収穫は多かった。この遊歴の記録は明治39年11月に民友社によって『七十八日遊記』として出版され、その内容は「過眼記程」と「触目偶感」の二部分からなる。前者は旅程順に著者が暇を見つけては各地での見聞を記したもの、後者はその副題「支那及支那人」からも分かるようにこの旅行での観察に基づいて中国と中国人の国民性とについて感想を述べたものである。

中国哲学の学者である宇野哲人が東京帝国大学助教授という身分で北京に留学したのは1906年で、期間は約二年間であった。留学とは言え、どこかの学校へ毎日のように通って学ぶというわけではない。むしろ視察旅行に重きを置いた遊学といえよう。二年の間、北京とその近郊のほかに、時間順に山東、長安、長沙、武漢、南京、鎮江、蘇州、杭州など中国の華北、黄河・長江中下流各地の名勝旧蹟を訪れている。古都洛陽、長安への旅は当時文部省派遣留学生として中国滞在中の京都帝国大学助教授、中国史学者の桑原隲蔵と同行した。二人とも漢学の造詣が深い学者であるだけにその旅行記は格調が高く、また内容も各地の名勝旧跡や歴史文物の紹介を中心としている。ただ桑原は毎日の出来事を日記風に書いているのに対して、宇野はそれぞれのものについて自分の感想を交えながら記事風に書いている。一緒に旅した長安について宇野は「長安紀行」、桑原は「長安之旅」と題して記しているので、あわせて読めば面白い。宇野は各地の旅行記をそれぞれ郷里熊本の両親に手紙として送ると同時に、熊本日日新聞にも寄せていたので連載されていた。後にその旅行記をベースに、さらに主には中国滞在中に書かれたと思われる数編の論文を加えて『支那文明記』（大同館、明治45年）と題して世に出している。その末尾に論文の一つとして「支那国民性論」が付されている。

その他、中国人の国民性に関するまとまった内容をもつ旅行記はまた佐藤善治郎の『南清紀行』（良明堂書店、明治44年）、川田鉄弥の『支那風韻記』（大倉書店、大正元年）などがあるが、本稿では取り上げないことにする。雑誌等に載せられた渡清日本人による中国人の国民性に関する文章も数多くあるが、内容的にまとまっているのは管見の限り奥田竹松の『我が観たる清国人』（『太陽』13巻14号、明治40年11月１日）、太白散人の『我が観たる支那』（『同仁』69号、明治45年２月１日）などがある。奥田竹松は明治28年に慶応大学を卒業後、明治32年文官高等試験に合格し、外交官として京城領事館に配属されたのを皮切りに、北京大使館書記官、ハンブルク総領事など長年外交に携わった人物である。太白散人は号であろうが、本名が分からず、どういう人物であったか未詳である。ただ、その『我が観たる支那』という文章の冒頭に、「余は七年来支那に遊ぶこと数次、支那の国民性、風俗習慣、生活状態、社会組織等を観察し、併せて国運の将来如何に変遷すべきかを研究せんことを心掛けたり」とあり、そこから中国に対して相当関心を持った人物であることが分かる。

二、中国人の国民性

では、高瀬敏徳や徳富蘇峰らは中国人の国民性に対してどのようにその議論を展開していたのか、以下数例をあげて具体的に見てみる。

1、「支那に国家なし」

〈中国人は個人本位の国民で愛国心がない〉とほぼ共通して認識されているが、論者によりその論じ方は異なっている部分も見られる。

高瀬敏徳は「支那」には国家がなく、清帝国はあくまでも国家に似た一個の団体であり、しかもその団体は「朽ちた縄をもて束ねたる一把の稲束の野に委棄せられたるに異ならず」[6)]とし、中国人の結合力と統一精神のなさを指摘する。そのうえで、当時ロシア、ドイツ、イギリス、フランスなどの列強各国が中国の多くの地域を割拠しているという危機的な現状から、もし精密な国家の定義を以てすれば清国はすでに存在しないと結論付けている。要するに、「支那」は広大な国土と四億の人民を擁して一つの大国のように見えるが、その国民の精神と社会の現状からすれば早晩亡国となる、いや寧ろすでに亡国であると論じている。つまり、中国人の愛国心の無さの指摘は単なる出発点であり、氏の強調しているのはその「支那亡国論」と言ってもよい。

徳富蘇峰は「支那には家ありて国なく、支那人には孝ありて忠なし」[7)]という言葉を掲げて、中国人には現在だけではなく従来国家的観念がほとんど見出されず、また地理的に見ても幾多の独立国を為すにはあまりに便宜が多く、一つの統一の国家を為すにはあまりに広大すぎると指摘する。「亡国」という言葉は見当たらないが、高瀬敏徳の「支那亡国論」に共通する部分もあり、中国は統一国家としてまとめるのが到底無理だと論じている。また徳富はさすがに幼少の頃から漢学塾に学んだ人物だけあって、中国の歴史事実に完全に眼をつぶるわけには行かない。『詩経』の「無衣」の詩句や、南宋時代の陸游の愛国詩をあげ、中国人に絶対愛国心がないというわけではないとも指摘する。ただ、それも僅かな外例であって、多くの共鳴は得られなかったとしている。

奥田竹松は、「支那人は世界の何れの国の人民よりも恐らくは自治にて適せる人民ならん」[8)]とし、それを出発点として中国人は個人本位で国家的観念がないと力説する。奥田の観察によると、中国人は従来政府の保護干渉を受けずに住民が各自相団結して自治自衛により生活を営む。政府の保護干渉はかえって迷惑視・厄介視され、住民が多く政府とかかわることなく、この数千年来完全に自治自衛している。王朝の興亡、人種の盛衰の如きは彼らの関心事ではない。ゆえに彼らは個人主義となり、国家的観念が発達しないという。

2、「支那人は利得の念盛なり」

中国は儒教の国である。儒教では普通「義を重んじ、利を軽んずる」ことが基本的な教えの一つとなっている。「利を見て義を思う」とあるように、儒教では利を得る前にまず義に合うかどうか考えなければならないとされ、誰でも利益を求めてよいが、その前提条件として義を守らなければならない。いわゆる「君子財を愛す、これを取るに道あり」である。

しかし、中国人の「利」について日本人はどう見ていたか。宇野哲人は「利己的」という一節のなかで触れ、ほかの4人は、中国人は「利得の念盛なり」(高瀬)、「利害の打算あり」(徳富)、「利欲の念のみ盛なり」(奥田)、「絶対なる利欲主義なり」[9)](太白散人)と口を揃えて厳しく批判している。それぞれの根拠は何か、具体的に見てみよう。

宇野哲人は、孟子が梁恵王に対して義利の辨を説いたのをはじめ、董仲舒も功利主義を排しているなど、歴代の学者が皆義利の弁を論じていることをあげて、それは「皆国民の利己的なるが為に之に対して特に之を教ふる必要が大であったからである」と説明している。また小説『官場現形記』などを例に、中国人の官吏は賄賂を受けるなど、名利への関心が甚だしいとも説いている[10)]。

高瀬はまず中国人の「勤勉にして倦まず、節欲にして飲食に耽らず、堅忍にして能く事に耐え、商売に敏にして信用を重んじ、団結心に富みて能く共同の事業を為す」という世によく言われる中国人の美徳を一応認めたうえで、その「真相」について、「(支那人は)その利得の念盛にして、その思想の野鄙吝嗇なること、広き世界に於てまた支那人に及ぶものなからん。之れ啻に彼の商賈のみ然るに非ず、彼の労働者のみ然るに非ず、高位大官の者と雖もまた皆な然り。即ち支那全体を通ずる国民の性格なり、気風なり。(中略)彼等が勤勉なるは利を得んが為めなり、彼等が堅忍なるも唯だ利欲の為めなり、彼等が節欲なるは金円を浪費せんことを恐れてなり、商売に敏なるは利に忠なるが故なり、信用を重んじ、団結心に富めるもまた皆な算盤玉より割り出したる利益心の発展に外ならざるなり。」と述べている。偏見きわまりない議論であるが、氏はさらにその実証として、中国人がよく物の価格を聞くこと、苦力や車夫が金銭を得るため苦痛を忍んで働くこと、農民が節約のため上等な日本産の昆布を購入しないことなどの例をあげ、中国人の利欲心がいかに盛んであるかを説明している。

徳富蘇峰は、まず中国人はだめだと判断すれば直ちに断念する例をあげ、もし中国人の哲学というべきものがあればそれは断念の哲学であると述べる。そのうえに、その原因として中国人には正邪の標準がなく、何事も損得勘定づくで損することはせず、ただ利害の打算ありと分析している。

奥田竹松は、「(支那人は)利欲の念熾盛なる人種なり。利害の計算には極めて鋭敏なる人種なり。(中略)彼らは本来怯懦臆病なる人種なれども、利益の為には強烈なる戦士たるべく、利は毎に彼らを動かす大動力たるものなり」と断定している。そしてその実証例として、上流社会の富者が驕奢を尽くすだけで、高尚な思想と情趣がなくその財産を毫も社会的公共的に使用しないこと、官僚から使用人までがそれぞれその分に応じて才取(さいとり)し上前をはねるのを罪悪と思わないこと、官僚の金銭上における廉恥心の乏しいことなどを挙げている。

太白散人は痛罵の口吻をもって自説を展開している。「彼等は義理も人情もなく利欲一天張(ママ)にして諸事万端徹頭徹尾打算的なり。喜ぶも利の為にし怒るも利の為にし、悲しむも利の為にし楽むも利の為にす。利あれば集まり利無ければ散す。(中略)彼等の短処其(ママ)長処欠点悪徳総てを一貫する骨髄は利欲なり。彼等一生涯の動作は之を詮ずるに利欲の一点に帰す。彼等死する時は身神(ママ)共に滅して只利欲の一点は熒々として之を子孫に遺伝するなり…」とまだまだ漫罵が続くが、冷静な分析が少なく、偏った表現が目立つ。

3、「固陋保守容易に移り難し」

中国人の保守的性格について、宇野哲人は周の成王が弟康叔封を殷の故地衛に封ずる時に、旧章に従って衛を治めよと告げたこと、宋の王安石による変法が失敗に終わったこと、明清時代の法典が千年前の唐の六典に比べて大差がないことなど、歴史上の事例をあげて客観的に説明している。奥田竹松も清朝における外国宣教師の布教活動の成果が上がらないこと、中国人が政府の組織より家居衣食の方法にいたるまで旧慣を墨守することなどの例を挙げて、中国人は「頑固保守にして容易に移り難し」と指摘している。

一方、徳富蘇峰は中国漫遊の際自ら目にした中国人の様子、たとえば市街は近世的になっており、店頭の飾り付けは西洋風を帯び、日用品も漸次外国製品または模造品が使用され、実際会った北京朝廷の大僚の応接間はいずれも西洋風で日本のそれと大差が無いなど、中国社会における西洋化の進展を根拠にして中国人は「真底からの保守人種にあらず」と見ている。

4、「文弱的国民」

中国人は「文弱的」「平和的」であるという。これについても、宇野哲人はさすがに中国史に精通する学者であって、数多くの史実を挙げている。たとえば、武という字は戈を止めると書いているように、中国人の考え方では武は干戈を止めるための手段である。実際周の武王が殷紂を伐ってから馬を山に帰し、干戈を包んで天下に再び武を用いないことを示した。これは中国人の理想的な行為である。また、漢の武帝が夷狄を撃って高祖の恥を雪ぎ遠く西域に入ったことを、中国人は後に黷武と言って誹議している。このように、中国人は文を重んじ武を軽んじるので、平和的国民であると同時に文弱であると結論付けている。

徳富蘇峰も「支那の古今を通して最も著明なるは文弱の一事に候」とし、中国人は外敵の侵入に対してただ防御するだけで、それを撃退するなどとは思いもよらないと説明している。また、中国人の男性に関羽、魯智深、武松などの英雄も存在し、総てを文弱とは言えないが、其の国柄も人柄も元来文弱であり、男性は女らしく、男らしい者を見出すのは難しいとも述べている。

5、「虚礼虚儀」

中国では古今を問わず自国を誇らかに礼儀の国と称する人が多い。「礼儀三百威儀三千」とあるように、礼儀は社会生活のあらゆる場面に応じて細かに決められ、人々はそれを行動の基準としたからである。この礼儀について、徳富蘇峰は、それは「全く嘘の皮」であり、ただ「虚偽を露骨ならざらしむるの方便」に過ぎず、中国人は「冷淡、無情、無礼、無作法」だから、このような人工的方便を設けたと完全に否定している。

太白散人は、中国人の仁義、礼法などは実際に応用するためのものではなく、ただ科挙試験を受けるために覚えたもので、「只是れ虚礼のみ虚飾のみ、真に論語読の論語知らず」と述べている。さらに中国人が礼儀や辞令に巧みなのは「礼儀文章を以て全然虚飾の具となし便佞阿諛以て立身を謀るの習い性となりたるものなるべく、大(ママ)た大国にして常に万里異郷の人と交際するにも因るべく、亦た他を欺瞞して自ら利せんとするの習性にも因るなるべし」とも述べ、

それを「虚礼の支那人巧言の支那人」の証拠としている。

奥田竹松も、中国は礼儀作法の厳重な国柄であると認識しながら、その礼儀は外国人から見れば多くは虚礼虚儀にして精神も実意もない形式的なもので、あらずもがなのものであると述べる。そして、「無作法無礼節無頓着に慣れた」日本人は中国に出かけたとき、それを馬鹿馬鹿しいと知りながらも郷に入らば郷に従う覚悟を持たなければならない。そうでないと、初めから彼らに寄せ付けられないなどの不利益があるとも述べ、自らの中国での生活の経験談とも見受けられる内容を紹介している。

以上、五つの側面から五人の論者による中国人国民性の議論を見てきたが、全体的に否定的な内容が多くを占めている。また高瀬敏徳、徳富蘇峰、奥田竹松、太白散人の四人は漫罵とも見られる過激な表現を多く使っているのに対して、宇野哲人は中国哲学者であるだけにその論説に歴史事実による比較的客観な分析が多く見られる。宇野はまた『支那文明記』の序文の中で「世人往々にして自己の乏しき経験を本とし、直ちに支那人を漫罵して忘恩背徳度し難いものとなすものがある。支那国民は果たして斯の如く漫罵し去るべきか」とも述べ、日本国内に充満していた中国蔑視の風潮と中国人を忘恩背徳と決め付ける日本人の独善とを批判している。これは自分には真実の中国を伝える責任があるという宇野の中国留学への抱負とも見受けられる。

上記五つの側面のほかに、まだ多種多様な内容があるが、ここでは紙幅の関係でこれ以上取り上げないことにする。彼らの議論の異同を比較するために、その主な内容を表１にまとめておく。

表１　高瀬敏徳らの見た中国人の国民性

著者（身分）及びその論著	中国漫遊または滞在の年	中国人国民性に関する主な内容（原文のまま）
高瀬敏徳（教習）『北清見聞録』	明治 35 年頃	支那に国家なし、利得の念盛なり、学問に熱心なる読書人、泥棒根性、神経遅鈍、意気地なき柔順、憐憫の情なし、遊情逸楽
宇野哲人（中国哲学者）『支那文明記』	明治 36－37 年	民主的、家族主義、利己的、迷信、誇張性、付和雷同、社交的、同和作用、保守的、服従心、平和的、社会的、悠長なること
徳富蘇峰（ジャーナリスト）『七十八日遊記』	明治 39 年	支那に国家なし、文弱的国民、女らしき男の国民、付景気（つけけいき）の戦争、防御に専らにして侵攻に拙なり、断念哲学、利害の打算、便宜主義、才取（さいとり）主義、病的の利己心、虚偽的方便の礼儀、形式の世の中、無頓着、大切なる結婚と葬式、沙魚の如し、真底からの保守人種にあらず、平民政治、先天的階級なし…

奥田竹松 （大使館書記） 『我が観たる清国人』	明治 40 年頃	支那人は個人本位の民なり、団結力強固なり、組織的能力に乏し、自尊心強し、利欲の念のみ盛なり、時間と労力の実価を知らず、固陋保守容易に移り難し、現在主義なり、経済的見地より観れば強き人民なり、健全なる中等社会を欠けり、平等な国なり、虚礼虚儀、早婚、家内的生活を喜ぶ、科学的知識に乏し
太白散人（未詳） 『我が観たる支那』	明治 45 年	支那人には人情なし、支那人に恥辱なし、支那人は絶対なる利欲主義なり、支那人は絶対の自己本位なり、支那人は尊大にして逼らず、支那人の忍耐力と其貯蓄心、支那人は能く動物と親しむ、虚礼の支那人・巧言の支那人、機敏なる支那人、支那の社会は分業なり、支那人は美食・美衣・賭博を好む、親族縁者に対する支那人、支那は古来自由競争の天地なり

三、日本における中国人国民性議論の背景

では、このような日本人の中国人国民性議論の背景に何があるのか。清末の中国においては、政治が正しく行われず、社会秩序が混乱し国民が苦難にあえいでいた。このような中国国内の深刻な状況は日本人の中国人国民性議論に大きく影響し、その大きな判断材料となったと思われる。また具体的に各論者それぞれの経歴や立場、中国に対する見方などもその議論の内容を異なるものにしたのであろう。本節ではとりあえず全体的に、明治後半期において中国に対する蔑視と差別の風潮が広まるなかでの中国に対する関心、日本民族優越意識の高まり、アメリカ人宣教師A・H・スミスの中国人国民性に関する著書『Chinese Characteristics』の日本への紹介という三つの側面から考えてみることにする。

１、蔑視と差別のなかでの関心

日本人は中国に対して、古来強い関心を抱いていたが、その中身には時代によって違いもある。とりわけ中国の伝統文化を尊重し、中国を聖人君子の国と見なした江戸時代と、西洋文化に傾倒し、中国の植民地化に関心を示し、中国人に対する蔑視が広がった明治時代との間には、その関心の中身が大きく違っていた。

江戸時代は儒教を官学として、儒教を中心とする中国の伝統的な学問が空前に興隆した。それを専門的に学んだ知識人は言うに及ばず、一般庶民でさえ中国に対して強く尊敬と崇拝の念を抱いていた。たとえば、古文辞学派の人たちは荻生徂徠が物茂卿と称したのをはじめ、服部南郭が服子遷、安藤東野が滕東璧などと、自分の名前を中国風に記し、日本の地名も京都を洛陽、東海道を長安道、相模川を湘水などと、中国風に表現することまでした[11)]。また、庶民の場合、たとえば陸奥国伊達郡金原田村の農民菅野八郎は、1854年神奈川に出てきた際、日本に開国を迫るアメリカのペリー一行を人々が「唐人」呼ぶことに対して、「唐土は日本の師国に

して敬うべき国なり。しかるに逆賊のアメリカ人をさして唐人とは何事たるや。あまり（にも）愚かの至りなり」と非難したといわれている[12)]。

江戸時代における日本人の中国崇拝は日本国内で儒学が興隆したことと、18世紀までの清帝国が確かに強盛な文化国家であったことによるところが大きいが、一方では中国の実態を見ることができず、儒教の書物を中心とした古典によって理想化された面もある。幕府の鎖国政策により日本人の海外渡航が禁止され、17世紀から19世紀までの約二百年の間に、ごく少数の例外を除いて中国に渡った日本人がなく、日本人の中国に関する知識や情報は書物とごく少数の来日中国人によるしかなかった。それゆえ、長崎に来日した中国人や、中国と近い関係にある朝鮮使節に接するのは知識人の生涯の夢のようなものであり、彼らにとって中国は憧れの理想国であると同時に幻の国でもあった。

このような状況は幕末から次第に変わっていった。1840年に中国とイギリスとの間で起きたアヘン戦争を始め、それに続く1857年にイギリス・フランス連合軍との間で始まったアロー戦争、1874年に琉球漁民殺害事件（1871）を理由に日本が起こした台湾出兵、1884年にベトナムの領有をめぐってフランスとの間で起きた清仏戦争、1894年に始まった日清戦争、1900年に義和団事件により八カ国連合軍との間で起きたいわゆる北清戦争など、いずれも中国側が敗北し、開港や領土の割譲、莫大な賠償金の支払いなどを余儀なくされ、中国の弱体ぶりが暴露された。また、1862年の千歳丸の上海派遣を皮切りに、幕末・明治期には中国へ渡航する日本人が増加し、彼らが弱体化した中国を自分の目で確認できるようになった。これらの出来事、とりわけ日清戦争の勝利は日本人の中国認識を大きく転換させ、江戸時代まで続いた日本人の中国崇拝が次第に中国蔑視に変わっていったのである[13)]。

このような変化について小島晋治氏は『幕末明治中国見聞録集成』の序文の中で、「この時代（幕末明治）は日本と中国の対等且つ平和な関係から、侵略と被侵略の関係に変化していき、それぞれの内部のあり方も大きくちがってきた。この中で多くの日本人は、古代中国の文化になお敬意を抱きつつ、現実の中国・中国人に対しては次第に蔑視意識を深めていった。このような時代のありようは、収録された多くの紀行文にも反映されている。」と簡潔にまとめている。実に的を射た意見である。

その時代に日本国内の中国蔑視の風潮がどれほど広まっていたかは、日清戦争後に一般化した「チャンチャン坊主」「チャンコロ」などといった中国人の蔑称がそれを何よりも如実に反映している。ここでひとつ1902年頃にある幼稚園の保母が残した記録を見てみよう。「まずチャンチャン坊主という詞、之は只ここに書くのでさえも大人げない詞ですが、此詞がどんなに広くひろまって居りましょうか。私は日清戦争よりもずっと前に、一時大いにはやった『日清談判破壊して』という俗歌のなかに『遺恨重なるチャンチャン坊主』という詞をはじめて聞き、いやに感じたことがございますが、そのころにはそんなにだれもがいうという風に拡まっては居らなかったように思います」とあり、また来日した中国人教育視察者が幼稚園を去った後、保母が幼児に「いまの支那人はえらい支那人である、支那人の中にえらい人は沢山ある」と話したら、幼児たちは「それでも先生支那人は弱くて日本の兵隊に負けて居る絵がありました」とか、「誰さんが支那人は弱いと言いました」とか、「あの支那人は日本の兵隊さんと戦いをし

たらどうですか」といろいろ反問を出した、などの内容がある[14]。日清戦争後、中国蔑視の意識が広まり、大人のみならず、幼児にまで浸透していた様子を如実に物語っている。

その蔑視と差別を誰よりも感じていたのは日本に渡った中国人留学生であろう。たとえば、中国の革命を大きく支えた宮崎滔天はこのような状況に置かれた中国人留学生たちに同情し、次のように日本人に警鐘を鳴らしたことがある。「寄語す、我が日本の当局者、政治家、教員、商人、下宿屋主人、下女、掏児、窃盗、淫売婦諸君よ、諸君が日夕豚尾漢として軽侮し、嘲笑し、詐取し、貪絞し、誘惑する支那留学生は、将に来らんとする支那国の建設者也。彼らは今垢を含みて諸君の侮辱を甘受しつつあり。然も心中豈に一片慊焉の情なからんや。彼等を侮辱するは彼等の侮辱を買ふ所以也。而して侮辱の交換は闘争に終わるを知らずや。殊に支那の強大を恐るるの士人は、深く思を此処に致して可也。」[15] ここからも留学生たちの受けた差別の様子を窺うことができよう。

このように、明治時代とりわけ日清戦争後に、日本人の中国認識は大きく変わった。しかし、中国が日本人のもっとも関心を持つ国のひとつであることには変わりがない。この時代には、ある識者が「余は日本人が一人にても多く支那の内地に入りて、生活の道を立てんことを望んでいる。分けて高等教育ある人々が支那の内地に入り、支那教化の大任を負はんことを希うのであるが、若し彼地に入りて其の風土人情に通じ、東洋の情勢に達することを得ば、豈啻支那人の為のみならんや。亦日本人の利たること枚挙すべからずであろう。今や一百万の日本人が支那の内地に入ったとて、日本国には毫も寂寞を感じない。」[16] と述べているように、日本人が積極的に中国へ出かけることが薦められていた。外務省通商局の統計によると、明治40年12月末日現在、中国の主要25都市に在留する日本人が34,988人に上り、それはアメリカを除いて世界各国の中で２位を占めている。都市別にみると、上海が6,268人と一番多く、安東5,754人、遼陽3,290人、奉天3,068人と続く。上海を除いて、日露戦争後勢力を拡大した東北地方の人数がほかの地域より圧倒的に多い。さらにその職業をみると、官公吏・中国側の傭聘者・教師・学生のほかに、各種の貿易商、実業経営者、職人、会社従業員などほぼあらゆる職業に及んでいる[17]。日本人の中国に対する関心の高さが十分窺えよう。

このような明治時代における日本人の中国への関心は大きな流れとしては中国植民地化への関心であり、蔑視と差別を伴った関心であると言ってもよかろう。この潮流の中で、江戸時代までは聖人君子にまで高まった中国の国民像も一変して保守、頑迷、虚偽、卑屈、不潔といったそれに堕ちてしまったのである。

２、日本民族優越意識の高まり

前に触れたように、日本人は江戸時代までは、主に中国を手本とし、中国との対比を通じて自己認識し、中国がその主要な鏡であった。それに対して、明治時代になってからは西洋化が進み、西洋と中国などの「アジアの悪友」とのいわば正反両面の鏡を用いてより立体的に自己認識しようとした。「東洋の中の日本」から「世界の中の日本」への大きな転換と言えよう。

明治時代の後半期に日本人が中国に対して多大な関心があったのは前に触れたが、それは「日本人は亜細亜の改革者たり、亜細亜の教育者たり、又た亜細亜の救済者たらざる可からず」[18]

という日本のアジアにおける位置と使命とに対する強い自覚及び民族優越意識にも深く関係している。日本人が西洋の知識を学ぶのはその文明を受け入れるためであるが、中国に関する知識を必要とするのは中国の実態を知った上で近代文明を彼らに与え、彼らの国を開発するためであるとさえ思われていた。

周知のとおり、1880年代から日本政府は欧米の文物・制度・風俗・習慣を取り入れ、欧化政策を積極的に推進した。これに反発して登場したのは政教社と民友社に代表される国粋主義団体である。三宅雪嶺･志賀重昂らにより設立された政教社は雑誌『日本人』を創刊し､「国粋保存」「国粋顕彰」を掲げ、日本の伝統文化と日本国民固有の特性を維持・発揚することを主張した。一方､徳富蘇峰を中心に設立された民友社は雑誌『国民之友』を創刊し「平民主義」を掲げて、政府が推進した過度でエリート的な欧化主義を「貴族的欧化主義」と批判して、日本の伝統文化に根ざした平民レベルでの欧化を目指した。このように、明治中期の国粋主義者は欧化それ自体を完全に拒否するものではなく、日本の国粋の保存と伸張に力点を置くべしと主張した。

こういう傾向は日本人の特質をめぐる議論を活発化させ、日本人の民族性や国民性そのものの賛美を中心とした論調を目立たせた。たとえば､三宅雪嶺の『真善美日本人』(政教社､1891年)は日本人の持つ特質を「真・善・美」と要約し、日本人がそれを伸張させ、日本の指導力の発揮と世界における日本の使命実現に努めなければならないと論じた。また、著者はその後に著した『偽悪醜日本人』では現実の日本人には「偽・悪・醜」の部分もあり、それを矯正するためには白人を模倣するのではなく日本人の有する「真・善・美」の特質を発展させなければならないとも指摘している。同じ政教社から出された志賀重昂の『日本風景論』(1894)は、日本の風景が欧米諸国や朝鮮半島、中国などより優れていることを気候・海洋・地形などの観察や比較に基づいて説き、日本国民に民族的優越性を感じさせ、日本国内のナショナリズム高揚に一役買った。そして二十世紀初頭に至り大きな反響を呼ぶ日本人国民性論が世に出る。芳賀矢一の『国民性十論』(1907)である。著者は日本の国民性の特質として、忠君愛国、祖先を崇び家名を重んず、現世的実際的、草木を愛し自然を喜ぶ、楽天洒落、淡白瀟洒、繊麗繊巧、清浄潔白、礼節作法、温和寛恕といった項目を挙げ、日露戦争を経て国際社会での地位を高めた日本に多大な自信を与えることとなった。

このように、日本人の主体的自覚はこのような日本人国民性論によって大いに高められ、そして日清戦争と日露戦争の連戦連勝と教育勅語による教育とがそれをさらなる高いレベルに押し上げ、日本人の民族優越感が形成され強化された。

このような民族優越意識は日本人の中国人国民性議論にも大きな影響を及ぼした。日本人が中国人の国民性を論じる際、とりわけ「支那に国家なし」「文弱な国民」など中国人の欠点と見られる点を述べる時に、よく日本人の愛国心や尚武精神を引き合いに出しているのはその一例である。また、「(日本人が) 支那人を厭忌し侮蔑するの論評は珍とするに足らず」という現状に鑑み､「敢て支那人の長所を挙げて我日本人の反省せんことを望む」論者もいた。彼は「支那人」[19] (無署名) という文章の中で敢えて中国の立場に立って論を展開し、侮蔑的な中国人観を是正しようとしているが、そこからも一等国民としての日本人の優越意識と中国人への差別意識が窺える。たとえば、中国人にも品位のある人がいるということを論じるため、「支那

人を社交上より見て一言にして評すれば富豪と貧民との社会なり、貧民は殆んど禽獣に近くして富豪は皆な王侯に擬す、其の禽獣に近き者に付きて之を見れば洵に厭忌すべきの人種たるに相違なし。然れども其の王侯を以て擬する富豪に就て見れば、彼の国の富豪は単に財産ありと云ふのみならず、知識あり、趣味あり、品位亦高く、所謂士君子の類にして我国の富豪の如く、黄金を唯一の本尊とする輩とは同一の論にあらず。」と述べ、貧民を差別的に禽獣に譬えるなどして、その限界を表している。

3、A・H・スミス『Chinese Characteristics』の出版と日本への紹介

中国人が自ら自国の国民性を論じるのは19世紀末からで、それ以前に中国人の国民性について細かく観察し、さらに比較・研究して記録に残したのは、中国滞在経験を持つ外国人旅行者や宣教師であった。とくに中国に渡った宣教師の人たちは好奇心に加えて布教活動をスムーズに進展させるためにも中国人の国民性を研究する必要があり、それに関する記録を多く残し、外国人が中国人の国民性を知るための貴重な記録となった。その中で、最も知られているのはアメリカ人宣教師A·H·スミスの著した『Chinese Characteristics』（『中国人の特性』[20]）であろう。

スミス（Arther Henderson Smith,1845 ～ 1932）は1872年に米国外国伝道委員会から派遣されて天津に至り、1877年に山東に入り、1882年に山東省西北境の恩県厖家荘に伝教の拠点を作り、以後数十年にわたり恩県を中心に伝道活動を続けた。また、スミスは宣教者でありながら、上海の英字新聞North China Daily News（中国名は字林西報）の山東地方通信員も長く務めた。その記事を書くために、彼は官僚から人力車夫に至るまで各階層の中国人に対して観察・調査を行い、北京で発行された新聞『邸報』などをほぼ一日も欠かさずに読み、中国人社会の状況や中国人の国民性について熱心に研究を重ねた。

1894年、スミスは英字新聞North China Daily Newsに発表していた数多くの記事を整理し、『Chinese Characteristics』と名づけ、アメリカニューヨークの出版社Fleming H. Revell Companyから出版し、たちまち莫大な人気を博して版を重ねた。

同書は出版から二年後の1896年に、渋江保[21]の翻訳により東京博文館から『支那人気質』と題して出版され、初めて日本に紹介された。抄訳ではあるが、訳注が数多く付けられており、本文だけでも446頁に及ぶ大部の書である[22]。日清戦争終結の直後で日本人の中国への関心が高かった出版当初はもちろん、その後も幅広く読まれたことが想像できる。例えば、芥川龍之介が大正10年３月に大阪毎日新聞社の海外視察員として中国へ出かける時に、必読書として『七十八日遊記』『支那文明記』『支那漫遊記』などと一緒に、『支那人気質』をも挙げているのはその一例である[23]。ちなみに同書は1940年にも白神徹の訳本『支那的性格』として中央公論社から刊行されている。日中戦争の最中の再出版は偶然とは言えまい。

一方、同書が中国で翻訳・出版されたのは日本よりかなり遅れた1903年で、しかも原本からの翻訳ではなく、渋江保訳『支那人気質』からの重訳である。書名はほぼ日本語版と同じく『支那人之気質』で上海の作新社から出版された。訳者の署名はないが、訳者によるものであると思われる序文[24]が載せられており、そこから翻訳の動機が伺える。

さて、ここでスミスの『中国人の特性』の内容を簡単に紹介しておく。著者は27章に分けて

中国人の国民性を独自の観察に基づいて紹介しているが、まず最初に取り上げたのはやはり中国人の面子を重んじるという点である。中国人からすれば当たり前のことであるが、著者から見ればいかにも新鮮で、しかもいささか不可解であったろう。そのあとに、節倹、勤勉、礼儀などの章が続く。これらは誰もが気付きやすい中国人の長所と見てよかろう。そのほかに長所と見てよい内容として、旺盛な生活力・辛抱強さ・孝行・仁恵などがあるが、それより多くの紙幅を割いたのは、たとえば時間無視、正確さ緻密さへの無頓着、面従後言、知的混沌、無神経、公共心の欠如、保守、思いやりのなさ、不誠実などといった中国人の短所と見られる内容である。

このような著書が、中国に対して侮蔑意識を強めながら大きな関心を抱く時代の日本に紹介され広く読まれたのである。日本人が中国人の国民性を議論する際、この書が一つの好材料となり、そこから一部影響を受けたのも想像に難くない。

四、中国人自らによる国民性批判との比較

19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国人自らによる国民性の議論も盛んに行われた。その中で最も注目されたのは維新派思想家の梁啓超によるものである。日本に亡命中の梁啓超は横浜で1898年に『清議報』を、1902年に『新民叢報』を創刊し、西欧や日本を鏡とした近代的な理念による国民国家の建設を目指して言論活動を展開した。その間、中国人の国民性に関しては、「論中国人種之将来」（『清議報』、1999年）、「国民十大元気論」（『清議報』、1999年）、「新民説」（『新民叢報』、1902－1906）、「論中国国民之品格」（『新民叢報』、1903年）など数多くの論説を発表している。来日後間もない1999年に書いた「論中国人種之将来」では、中国人の国民性を、一に自治力に富み、二に冒険独立の性質があり、三に学問に長け思想が発達しやすく、四に民人が衆多にして、物産が豊富であると概括し、「二十世紀に、中国人は必ず世界上最も勢力の有る人種に為る」と見ていた[25]のに対して、「論中国国民之品格」では中国の国民性の欠点を、一に愛国心の薄弱、二に独立性の脆弱、三に公共心の欠如、四に自治能力の欠如[26]と概括し、国民性改造の必要性を促している。ここには彼の中国人国民性に対する認識の変化がはっきり窺えるが、その思想の変化について、彼は「東（日本）に居てより以来、広く日本書を捜して之を読み、山蔭道の上を行くが若き、応接に暇あらず、脳質之が為に改易し、思想言論 前の者と〔比べて〕両人より出づるが若し。」[27]と述べ、来日後に日本書を読むことによって思想が大きく変わったと自ら分析している。ちなみに、一般的には日本で「nationality」の訳語として創出された「国民性」という言葉も梁啓超によって中国に輸入されたとされている。

魯迅をはじめ、日本に渡った中国人留学生も中国人の国民性に対して大きな関心を寄せ、議論に加わり、その論説を『浙江潮』『江蘇』『湖北学生界』『遊学訳編』など自ら創刊した雑誌に発表したりした。1902年に日本に渡った魯迅がのちに文学作品を通じて中国人の国民性に対して猛烈な批判を行ったことはあまりにもよく知られている[28]。また雑誌『浙江潮』[29]の場合は、楊海雲の調査によると、中国人の国民性に対する批判の論説が多くみられ、とくに中国人は「国家意識が薄弱」、「保守的で進取心が欠如し、精神が退廃的」、「私利私欲の念が盛んで、公共心と社会的責任感が欠如」、「意志が薄弱で忍耐力が欠けている」、「自治力・民族的自覚が

ない」とされ、西洋人や日本民族の優秀性に対比させながら中国人を批判するのはその常套手段であったという[30)]。

このように、清末に展開された中国人自らによる国民性議論も中国人の弱点の暴露や批判の内容が多い。その議論の主体となる人々――日本留学生に代表される革命派にしても、梁啓超に代表される維新改良派にしても、彼らの思想が日本から多く影響を受けているのは論を待たないが、彼らによる中国人国民性批判も上述の梁啓超と雑誌『浙江潮』の例から分かるように、日本人の議論から影響を受けている。

しかし、批判の内容において、革命派も維新改良派も日本人の議論と一致している部分が多いとはいえ、その論じ方と動機には大きな違いがある。日本人の中国人国民性批判の背景には、前に触れたように、中国に対する蔑視と差別の風潮、中国植民地化への関心の高まり、日本民族優越意識、欧米人の中国批判、弱体化した中国社会の現実から受けた衝撃などがあげられる。中国人の場合、革命派にしても維新改良派にしても、中国人であることには変わりがなく、彼らの批判はまず愛国心によるもので、そこには中国人の覚醒と中華民族の振興という期待が込められていると見てよかろう。しかし、両者の狙いには違いもある。維新改良派は国民性批判を通じて中国人の民度がまだ低いことを主張し、それを彼らの革命に反対する理由の一つとする。一方、革命派は革命を通じて国民性を改造することも可能であると主張し、革命は民度を高めてから行うべきという維新改良派の思想を批判している。

以下、中国人の愛国心または国家意識の欠如に対する批判を例にして、中国人と日本人との論じ方あるいは動機の違いを具体的に考察してみる。

本稿「二、中国人の国民性」で取り上げたように、高瀬敏徳は中国人の国家意識の無さを根拠に中国は早晩亡国となると論じ、また徳富蘇峰も中国人の国家的観念の無さと地理的広さからして、中国を一つの統一国家としてまとめるのは無理であると説いている。それに対して、奥田竹松は、「支那人は世界の何れの国の人民よりも恐らくは自治にて適せる人民ならん」とし、それを出発点として中国人は個人本位で国家的観念がないと力説している。近代にいたるまで、確かに中国の庶民にとっては「国家」というものは遠く離れた存在で、そういう意味で中国人の国家意識が薄いと見てもよかろう。しかし、多くの日本人論者のように、そこから中国の亡国または分裂、分割という結論を導くのは必ずしも妥当とは思われない。時代の風潮とその後の日本の動きをあわせて見ると、そこには日本人の中国に対する蔑視と差別、中国侵出への関心などの要素が働いていることも十分考えられる。

では、中国人の場合はどうだろうか。ここでは梁啓超の『論中国国民之品格』の愛国心に関する部分を引用して、その論じ方を考察してみる。

「支那人に愛国心無し、此れ東西人の我を詆る恒言なり。吾聞きて之に憤り之に恥ず。然るに反って観、自ら省みるに、誠に然りと謂わざる能わざるなり。我国の国民、専制の下に奴隷と為るに習い、国家を視て帝王の私産にして、吾儕の与(あずか)りて有(たも)つ所に非ずと為す。故に国家の盛衰興敗に於いて、秦人の越人の肥瘠を視るが如く、漠然として少しも心を動かさず、智・愚・賢・不肖と無く、皆皇然として一家一身の計を為す。吾敢えて身家の当に愛すべからずと謂うには非らざるなり。然れども国は身家の托属にして、苟も国家の藩

楯を得、以て之が為に其の害患を防ぎ、其の治安を謀るに非ずんば、則ち徒だ此の托属する所無き身家を挈(たずさ)えるのみにして、累累として喪家の狗の若し。『皮の存ぜざれば、毛将に焉(いず)くにか付かん』、勢必ず猶太(ユダヤ)人の流離瑣尾の如く、一日も天壌の間に立つ能わず。然らば、先ず其の身家の私計を犠牲にして、力を竭して以て其の国勢を張るに非ずんば、則ち必ず身家の藩楯と為り、我が為に害患を防ぎて治安を謀る能わず。故に夫れ愛国と云う者、質して之を言えば、直だ自愛のみ。人にして自愛を知ざれば、固より禽獣にも之れ若かず、人にして禽獣に若かざれば、尚お何の品格かこれ言うに足らんや。」[31)]

中国人に愛国心または国家意識がないというのは梁啓超にとっても自らが気づいたものではなく、「東西人」の議論から初めて知ったという。彼は最初それを日本人と西洋人がいつも「我を詆る」言葉だと認識し、憤りもし恥にも感じたが、中国人として冷静に反省してみれば、日本人と西洋人のそういう指摘を素直に認めなければならないと思った。というのは、中国人が国家の盛衰興廃よりも個人と家族の利益に関心を寄せていると彼は見たからである。しかし、彼は国家にこそ個人と家族を依託し帰属させるのであり、国家への帰属を失った人・家は国家の保護を受けられず、「喪家の犬」と変りがないと認識し、こういう状態を決して良しとは思わなかった。そして、最後に国民は国勢を伸張させるために個人の利益を犠牲にしても、国を愛し、力を尽くさなければならない、なぜなら、国を愛するのは自らを愛するのと同じ、それこそ人の最も基本的な品格であると結論付けている。このように、彼は外国人に「支那人に愛国心無し」と言われるのを中国人の恥と受け止め、その恥辱を雪ぐために、中国人が愛国心を高めなければならないと自国民に奮起を促したのである。そこに彼の強い愛国心を感じると同時に、彼の中国人国民性批判が単に批判に止まらず、中国人の国民性を改造して中国を列強の支配から抜け出させ、さらに中華民族の振興を期待するものであったのは明白である。

終わりに

以上、明治後半期に中国旅行または滞在の経験を持った高瀬敏徳、徳富蘇峰、宇野哲人らによる中国人国民性議論に基づいて、彼らの中国人国民性に対する認識をまとめ、さらに日本人による中国人国民性議論の背景、それと中国人自らによる国民性議論との関連を考察した。

「支那に国家なし」「支那人は利得の念盛なり」「固陋保守容易に移り難し」「文弱的国民」「虚礼虚儀」などの指摘に代表されるように、多くの日本人論者の中国人国民性に対する認識は強烈な批判を主な内容としている。そこには、清末の中国において、政治が正しく行われず、社会秩序が混乱し国民が苦難に喘ぐという中国国内の深刻な現状、明治時代とりわけ日清戦争後に広まった日本国内の中国に対する蔑視と差別の風潮、中国侵出とも関連する中国への関心、日本国内における日本人国民性議論や日清戦争と日露戦争の戦勝などによって高められた日本民族優越意識、アメリカ人宣教師A・H・スミス著『Chinese Characteristics』の日本への紹介、などの背景がある。これとほぼ同じ時期に留学生など日本滞在経験のある人たちを中心に中国人自らによる国民性批判も盛んに行われていた。それには日本人の議論からの影響が見られる一方、中国人自らの批判は中国人に奮起を促す強い愛国心によるもので、日本人のそれと比べれば、論じ方や動機の面においては大きな違いが見られる。

高瀬敏徳ら五人の論者の中国旅行または滞在の経験、それぞれの経歴や立場などが具体的にその中国国民性認識にどう影響を及ぼしたか、新聞や雑誌に載せられた中国人国民性議論はその新聞や雑誌の性質からどのような違いが見られるか、明治時代の中国人国民性議論が大正・昭和時代にどのような形で受け継がれたかなど、本稿では取り上げられなかったが、興味深い問題がまだ多くある。今後の課題としておきたい。

注

1）上野岩太郎『北清見聞録序』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第15巻、ゆまに書房、平成９年10月、15頁。

2）赴任の時間について旅行記には８月26日と示しているだけで、年が明らかにされていない。ただ氏が中国滞在中に雑誌『新人』に三回にわたって通信を載せており、その初回は明治36年２月１日であるので、渡航の年は明治35年ではないかと思われる。

3）中国人の教育を目的に中島裁之により1901年に設立されたものである。

4）徳富蘇峰『北清見聞録序』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、13頁。

5）徳富蘇峰『七十八日遊記』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、224－225頁。

6）高瀬敏徳『北清見聞録』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、118－119頁。なお、本節で引用した高瀬敏徳の論説は同書118－145頁による。以下一々注記しないことにする。

7）徳富蘇峰『七十八日遊記』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、232頁。なお、本節で引用した徳富蘇峰の論説は同書229－234頁による。以下一々注記しないことにする。

8）奥田竹松『我が観たる清国人』（『太陽』13巻14号、明治40年11月１日）、近代アジア教育史研究会編『近代日本のアジア教育認識』第25巻所収、竜渓書舎、2002年、235頁。なお、本節で引用した奥田竹松の論説は同書234－242頁による。以下一々注記しないことにする。

9）太白散人『我が観たる支那』（『同仁』69号、明治45年２月１日）、『近代日本のアジア教育認識』第19巻所収、281頁。なお、本節で引用した太白散人の論説は同書281－289頁による。以下一々注記しないことにする。

10）宇野哲人『支那文明記』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第８巻所収）、399－400頁。なお、本節で引用した宇野哲人の論説は同書391－414頁による。以下一々注記しないことにする。

11）佐藤三郎『近代日中交渉史の研究』、吉川弘文館、1984年、95頁。

12）小島晋治『中国人の日本観の変化－幕末･維新期を中心に－』、日中文化論集、神奈川大学人文学研究所、2002年３月、89頁。

13）近代日本における中国認識に関して、劉岳兵は「東アジア文化交流―学術論争の止揚を目指して」国際シンポジウム（2009年９月18－20日、浙江工商大学日本文化研究所主催）の報告「近代日本における中国認識の原型とその変遷の論理について」のなかで、次のように述べている。近代日本における中国認識は日本の「主体的な選択」を無視することができない。いわゆる「主体的選択」は論理的には以下の意味を含む。まず中国のことを相対化、対象化、或は客体化すること。次に相対化された中国に対して、強い警戒心を持ったり、「与国」にしようとしたり、侵略しようとしたり、また「裂眥罵詈」したりすること。最後に文化中国と現実中国とを分裂させること。

14）ひさ子「支那人に対する幼児の考」、『婦人と子ども』２－８頁、明治35年８月５日。

15）宮崎滔天「支那留学生について」、『宮崎滔天全集』第４巻、平凡社、昭和48年、56頁。

16）海老名弾正『北清見聞録序』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、20頁。

17）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04014459300 、明治42年3月「壹大日記」「海外各地在留本邦人職業表送付の件」(防衛省防衛研究所)。各都市の数字は次のようである。安東5754人、奉天3068人、遼陽3290人、鉄嶺2216人、新民府181人、牛荘2785人、長春1571人、吉林202人、哈爾賓989人、北京758人、天津2387人、芝罘680人、上海6268人、南京233人、蘇州163人、杭州98人、漢口1387人、長沙123人、沙市と宜昌12人、重慶114人、福州510人、厦門1684人、汕頭301人、広東214人。

18）浮田和民『北清見聞録序』（前掲『幕末明治中国見聞録集成』第15巻所収）、24頁。

19）『日本人』171号、明治35年９月20日。

20）後述するように、日本語訳は渋江保訳の『支那人気質』と白神徹訳の『支那的性格』があるが、本稿では特定の場合以外には『中国人の特性』とする。

21）訳者の渋江保については、森鴎外の小説『渋江抽斎』（中公文庫、1988年、310頁）に次の紹介がある。「抽斎の後裔にして今に存じているものは、上記のごとく、先ず指を牛込の渋江氏に屈せなくてはならない。主人の保さんは抽斎の第七子で、継嗣となったものである。経を漁村、竹逕の海保氏父子、嶋田篁村、兼松石居、根本羽嶽に、漢医方を多紀雲従に受け、師範学校において、教育家として養成せられ、共立学舎、慶応義塾において英語を研究し、浜松、静岡にあっては、あるいは校長となり、あるいは教頭となり、かたわら新聞記者として、政治を論じた。しかし最も大いに精力を費したものは、書肆博文館のためにする著作翻訳で、その刊行する所の書が、通計約百五十部の多きに至っている。その書は随時世人を啓発した功はあるにしても、おおむね皆時尚を追う書估の誅求に応じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたといわざるを得ない。そして保さんは自らこれを知っている。畢竟文士と書估との関係はミュチュアリスムであるべきのに、実はパラジチスムになっている。保さんは生物学上の亭主役をしたのである。」

22）『支那的気質』の翻訳・出版及びその訳注の内容などについては、本文に掲げた李冬木論文「渋江保訳『支那人気質』与魯迅－魯迅与日本書之一」の中で詳しく紹介されている。

23）芥川龍之介「奇遭」、『芥川龍之介全集』第７巻、1996年、岩波書店、279頁。

24）不可不訳之説三：或問，何為訳此《支那人気質》？曰：我支那人而無此気質，可不訳；我支那人即有此気質，而世无人知，可不訳；我支那人即有此気質，世人即知之，而我支那人亦自知之，尚可不訳。今也，何如？不可不知之説四：或問，読是有何益？曰：不知之，不能改良学問；不知之，不能改良教育；不知之，不能改良風俗；不知之，不能改良国政。（訳さざるべからざるの説に三つあり。或るひと問う、何為れぞ此の『支那人気質』を訳せしかと。曰く、我が支那人にして此の気質無ければ、訳さざる可し。我が支那人に即しこの気質有れども、而して世に人の知ること無ければ、訳さざる可し。我が支那人に即し此の気質あり、世の人も即し之を知れども、我が支那人も亦之を知らば、尚お訳さざる可し。今や、如何？知らざるべからざるの説に四つあり。或るひと問う。是を読むに何の益か有ると。曰く、之を知らざれば、学問を改良する能わず。之を知らざれば、教育を改良する能わず。之を知らざれば、風俗を改良する能わず。之を知らざれば、国政を改良する能わず。）

25）梁啓超『飲氷室合集・文集之三』、中華書局、1989年、52頁。

26）梁啓超『飲氷室合集・文集之十四』、中華書局、1989年、１頁。

27）梁啓超『飲氷室合集・専集之二十二』、中華書局、1989年、185頁。原文：自居東以来，広搜日本書而読之，若行山蔭道上，応接不暇，脳質為之改易，思想言論，與前者若出両人。

28）魯迅の中国人国民性批判は日本留学時代に読んだ渋江保訳『支那人気質』などの書物や日本人の議論から受けた影響が大きい。それについて、数多くの研究成果が上がっているが、ここでは参考のため、李冬木「『支那人気質』與魯迅文本初探」（関西外国語大学研究論集、69号、1999年２月）、北岡正子「もう一つの国民性論議－魯迅・許寿裳の国民性論議への波動」（関西大学中国文学会紀要、10号、1989年３月）を挙げておく。

29）1903年に浙江省出身の留学生によって創刊されたものである。

30）楊海雲「論『浙江潮』対国民性的批判」（『浙江潮』における国民性に対する批判を論ずる）、楽山師範学院学報、第19巻第３期、2004年３月、126－128頁。

31）前掲注25に同じ。原文：支那人無愛国心，此東西人詆我之恒言也。吾聞而憤之恥之，然反観自省，誠不能不謂然也。我国国民，習為奴隷於専制政体之下，視国家為帝王之私産，非吾儕所与有，故於国家之盛衰興敗，如秦人視越人之肥瘠，漠然不少動於心，無智愚賢不肖，皆皇然為一家一身之計。吾非敢謂身家之不当愛也，然国者身家之托属，苟非得国家之藩楯，以為之防其害患，謀其治安，則徒挈此无所托属之身家，累累若喪家之狗，“皮之不存，毛将焉附？”勢必如猶太人之流離瑣尾，不能一日立於天壌之間。然非先犠牲其身家之私計，竭力以張其国勢，則必不能為身家之藩楯，為我防害患而謀治安。故夫愛国云者，質言之，直自愛而已。人而不知自愛，固禽獣之不若矣，人而禽獣不若，尚何品格之足言耶？